

# 多義語における歴史的変化と共時的ネットワーク

## The Diachronic Changes and Synchronic Networks of Polysemous Words

武田 勝 昭  
TAKEDA Katsuaki

2002年10月11日受理

### 〔目 次〕

- 1 はじめに
  - 2 意義転換の分類
  - 3 図解による語義変化の考察
  - 4 語義変化と多義ネットワークの相関
  - 5 むすび
- 参考文献

### 1 はじめに

多義は語の意義が変化することによって生じる現象で、「おおまかにいって、通時的意味変化の共時的反映である」(Geeraerts 1997:6. Cf.1985:142)。従って、「共時的多義と意義の歴史的変化とは多くの点で同じデータを提供する」(Sweetser 1990:9) のである。

ある語の多義のネットワークを記述する際に、意義と意義との関連を共時的に説明しにくいことがある。そのような時、語義変化を通時的にたどることによって、意義どうしの関連が明らかになる場合がある(Nerlich and Clarke 1992:131)。また逆に、多義の共時的分析が通時的分析に役立つこともある(Sweetser 1990: 45-46)。

例えば、英語の“score”には「得点」の意義とならんで「20」の意義がある、共時的には二つの意義の間に論理的な関連を見出すことはむずかしい。この語は歴史を遡ると“shear”と同根の語で、羊飼いが羊の頭数を数える際に棒や杭などに20頭単位で刻み目を入れたことに由来するとされる。つまり、「20」を意味していたこの語は、やがて意義領域を拡大してゲームなどの点数や

成績を意味するようになったのである。このように“score”の歴史的な意義の変化を知ることによって、「得点」と「20」との間にある論理的な飛躍をうずめることができるのである。

小論の目的は、語の通時的意義変化をたどることによって得られる知見が語の多義ネットワークの記述にどのように貢献しうるかを、具体例によって検証することにある。

## 2 意義転換の分類

語の新たな意義はどのような認知的な仕組みによって生まれるのであろうか。歴史意味論の研究者とりわけ初期の意味論研究者、例えばBréal (1964)、Stern (1931)、Ullmann (1957; 1962; 1964)などに、語義の変化を分類するにあたって、二項対立の方法論を用いる傾向があった (Traugott 2002:4)。例えばUllmann(1962:211-235)は、意義どうしの間にはたらく連想 (association) に基づくものと語形 (names) どうしの間にはたらく連想に基づくものとに大別する。その上で、それらの二つのカテゴリーをさらに類似性 (メタファー) に基づくものと、隣接性 (メトニミー) に基づくものとに下位区分する。Nerlich and Clarke (1992: 127) は、意義変化のタイプとしてメタファーおよびメトニミーを基本に据えつつ、控えめに婉曲法 (euphemism) を加えている。

Geeraerts (1997:95) は、明示的な語義の変化はおおむねメタファー、メトニミー、特殊化 (specification)、一般化 (generalization) の4種類に分類されてきたとみる。特殊化とは、液体を飲むことを意味する“to drink”で「飲酒する」を意味する類の現象で、本来の意義領域に含まれる特殊な対象を指示するようになることである。また一般化とは、地球の衛星を意味する“moon”で他の惑星の衛星をも指示するような、指示領域の拡大をいう。

二項対立的なメタファー、メトニミー、特殊化、一般化による分類は、実質的には比喩の3形式つまりメタファー、メトニミー、シネクドキに再編することが可能である。これまで、特殊化と一般化とは、比喩形式からみれば、一般で特殊を表すシネクドキ (種で類を表すシネクドキ) および特殊を一般で表すシネクドキ (種で類を表すシネクドキ) に他ならないからである。

比喩の形式をその認知構造の違いによって截然と分類した瀬戸 (1986; 1995; 1997a) に従えば、それらは次のように分類し定義することができる。

メタファー： 二つのモノの意味の類似性に基づく比喩

メトニミー： 二つのモノの現実的な隣接関係に基づく比喩

シネクドキ： 二つのモノの意味の包含関係 (類と種の関係) に基づく比喩

小論では、通時的にみた語義の変化および共時的にみた多義ネットワークを支える認知的仕組みは、上記のモデルで説明しうるという立場をとる。

ところで、これまで通時的視点から「意義の変化」と呼んできたものを、共時的視点からおなじく意義の変化と呼ぶことはできない。そこで、通時的にも共時的にも適用できる「意義の転換」という呼称を用い、さらに、瀬戸 (1997b) に従って比喩の3形式と対応させて「S転換」「E転

換]「C転換」という呼称を用いることにする。

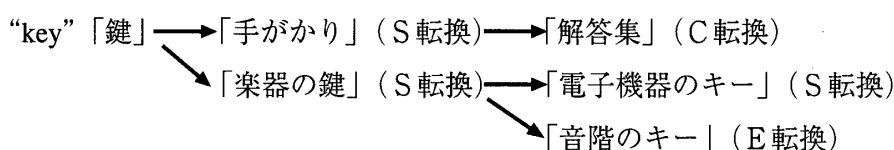
S転換： 二つの概念の類似性 (similarity) に基づくメタファー転換

E転換： 二つのモノ (entity) の隣接性に基づくメトニミー転換

C転換： 二つの概念相互の範疇 (category) の類と種の関係に基づくシネクドキ転換

これらの意義転換の3つの形式を名詞“key”を例にあげて確認しておきたい。

“key”の意義転換は、およそ次の樹形図で表すことができるだろう。



「鍵」は大切なものを他者から守るためにかかる錠を開くための道具である。また鍵は、未解決のものごとを解き明かすために必要なことがらと類似した機能をもつために「手がかり」へとS転換をとげる。はじめは個別の手がかりを意味したこの意義は、さらに集合概念としての手がかりを表す「解答集」へと適用範囲を広めていった。この転換は、シネクドク的な意義の拡大で、C転換とみなすことができる。「鍵」から「楽器の鍵」への転換は、特定の「けん」を押したりたたいたりすることによって特定の音を出すことができるという機能類似から生まれたS転換である。タイプライターや電子機器の「キー」は、形態的にもまた機能的にも楽器の鍵ときわめてよく似ており、ごく自然なS転換であったといえよう。一方、鍵盤を操作することによって生じる音の高低を意味する音階の「キー」は、鍵盤を操作することによって生じる結果でありメトニミーによるE転換であるが、同時に音という物理現象と関連づけられた抽象的な特性をも表している(メトニミーの下位区分については瀬戸(1999)およびSeto(1999)を参照)。

以上は通時的にみた“key”の語義変化であるが、その変化を表す樹形図はそのまま現代における“key”の意義のネットワークをも表している。

### 3 図解による語義変化の考察

それではここで、“bottom” “road” “press”を例にとり、それぞれの語義の変化をOED<sup>2</sup>のデータを用いて樹形図で表してみる。OED<sup>2</sup>の意義分類にしたがって、縦軸に意義を、そして横軸にはそれぞれの意義の使われた期間を表している。太線は語源的な意義および現代英語において中核となる意義である。矢印は意義の転換を示し、とくにカテゴリー変換を伴う大きな意義転換は太線で示してある(意義転換が推測の域をでないものは、薄い矢印線で表記)。またアルファベットの太文字で示したS、E、CはそれぞれS転換、E転換、C転換の謂いである。右端の意義に付した番号はOED<sup>2</sup>の分類番号を示す。意義の中で同一のグループに属するとみなせるものを破線で

図1 bottom

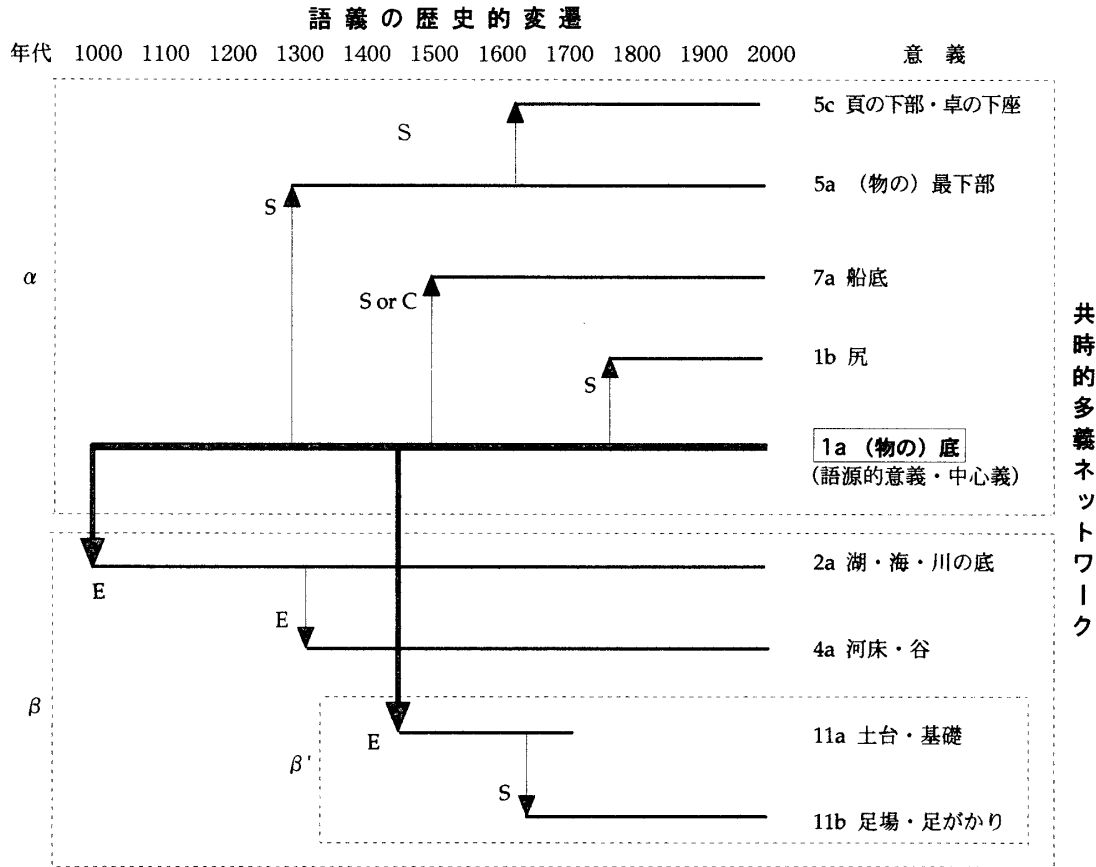
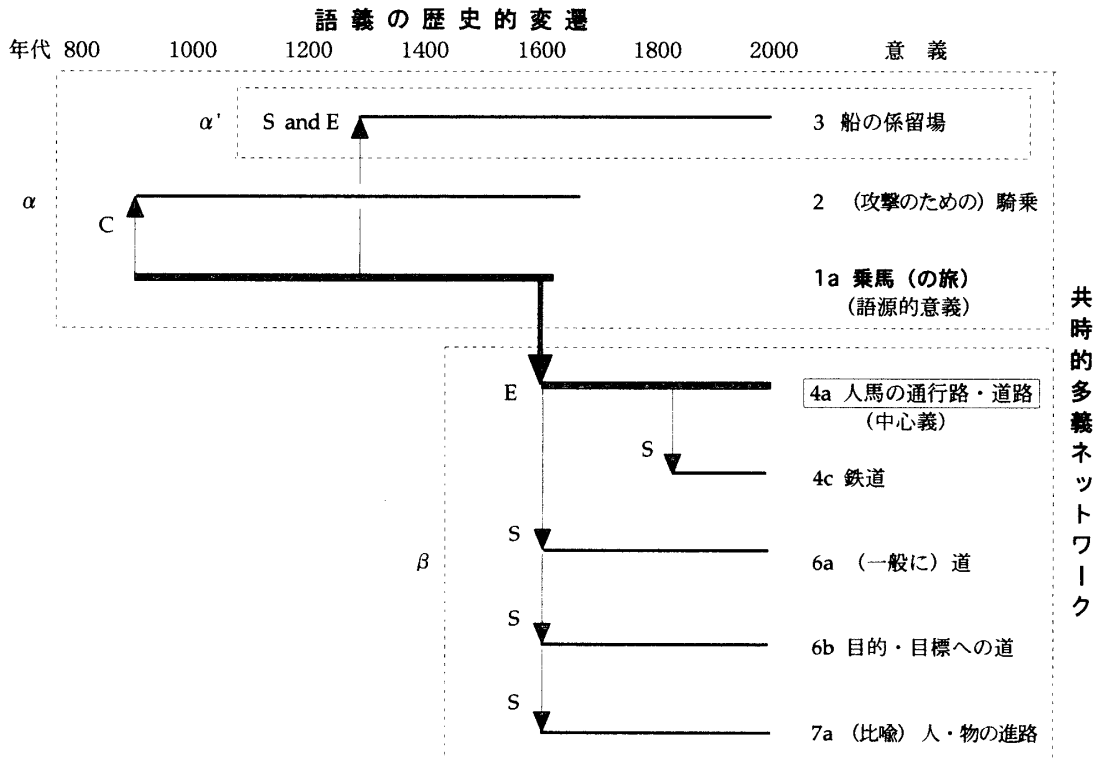


図2 road



囲ってある。

OED<sup>2</sup>の詳細な意義分類をすべて盛り込んで図示するのはむずかしくもあり、またここではその必要もないので、マイナーな意義の大半は省略した。

語の語源的意義は歴史にもまれながらも、現代英語に至るまで一貫してその語の中心的意義でありつづけることが多い。“bottom”（前ページ図1参照）もその1つである。

“bottom”の語源的意義は「(ものの)底」で、現代英語まで一貫している。ただ、日本語で「船が海底に沈んだ」とも「海底に亀裂が生じた」ともいうように、“the bottom of the sea”は、「水の底」を指すこともあれば、「海の地盤」を指すこともある。これは視点を水の底部に向けるか、水が接する地盤に目を向けるかの違いによるもので、人の首を指す“neck”が首と接する衣類の襟首を指すようになったのと似ている。ただし、OED<sup>2</sup>における“bottom”の二つの意義は、初出例がいずれも1000年で、きわめて早い時期から区別なく使われていたことがわかる。

語源的意義が突如として中心的意義を失い、別の意義にその座を譲ってしまった例として“road”（前ページ図2参照）をあげることができる。この語は、動詞“ride”と語根を同じくする語で、「乗馬」または「乗馬の旅」を意味した。ところが16世紀末ないし17世紀初めに「人馬の通行路」つまり「道路」の意義が生れると、語源的意義は、中心的意義としての地位をゆずったばかりか、その意義自体が姿を消してしまうのである。「乗馬(の旅)」という行為を表す語がその行為を遂行するための場所を表す「通行路」を意味するようになったのはE転換による。このようにE転換は、ドラスティックな意義転換を生むことがある。

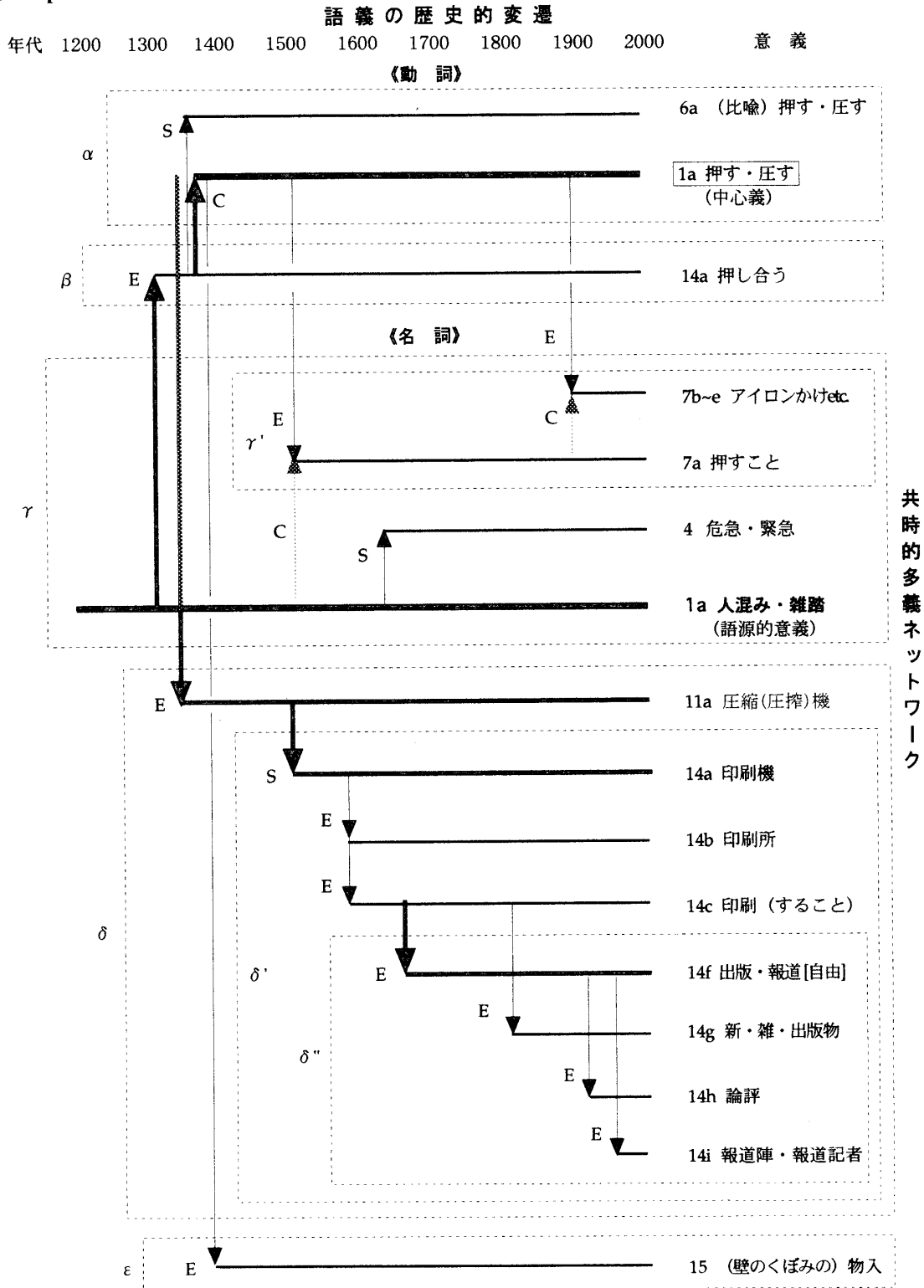
“road”の語義変化に見られるもう一つの顕著な現象は、「人馬の通行路」の意義が生れたのとほぼ軌を一にして「(一般に)道」「目的・目標への道」「人・物の進路」などの意義がいっせいに現れることである。これは、“road”がこれらの意義をもつようになる以前に、“way”“street”“path”などの類義語がすでに存在しており、それらの語の意義が“road”に同様の新しい意義転換を促したものと思われる。

“press”（次ページ図3参照）は現代英語では動詞イメージの強い語であるが、OED<sup>2</sup>の初出例は名詞が1225年で動詞の1385年よりも160年古いことから、フランス語から借入された当初は名詞として使われた可能性が高い。OED<sup>2</sup>によるこの語の意義でもっとも古いのは「人込み」「雑踏」で、ついで古いのがE転換によって派生したと思われる動詞の「押し合う」という意義である。現代英語の中心的な意義である「押(圧)す」は、人が押し合うという意義がさらに一般化(C転換)して生まれたと考えられる。

“press”の語義変遷におけるもう一つの顕著な現象は、印刷および報道へと意義を展開させたことである。“press”が「印刷機」の意義で使われるのはそれ以前に使われていた「圧縮(圧搾)機」からの転用で、両者の類似性に着目したS転換である。問題は、「圧縮(圧搾)機」の意義が“press”のどの意義から派生したかということである。「圧縮(圧搾)機」でのOED<sup>2</sup>の初出は1362年で、グーテンベルクが印刷機を発明したのが1450年前後、カクストン(William Caxton)が英国

で印刷を始めたのが1470年代とされる。「圧縮(圧搾)機」の意義は、名詞の「人込み」から派生したと考えるよりも、動詞の「押(圧)す」から派生したと考えるのが自然であろう。「押(圧)す」の意義初出は1385年で、「圧縮(圧搾)機」よりも19年後になるが、これは文献上の誤差とみ

図3 press



なしうるであろう。動詞「押(圧)す」から「圧縮(圧搾)機」が派生したとすれば、これは機能によって道具を表わすE転換である。

ただし、“press”は外来語であり、また圧縮(圧搾)機や印刷機が同時代にヨーロッパ各地で広く使われた道具であることを考慮すれば、意義の生成を英語の内部にのみ求めるのは危険かもしれない。

「印刷機」が誕生して以来の“press”の意義の変化には目覚しいものがある。OED<sup>2</sup>の初出をたどると、「印刷機」が1507年、「印刷所」が1579年、「印刷(すること)」が1579年である。「印刷機」から「印刷所」「印刷」への意義の派生は、いうまでもなくメトニミックなE転換である。

印刷技術や印刷事業の発展に伴って、印刷関連の意義から「出版・報道の自由」「新聞・雑誌・出版物」などの出版や報道にかかわる意義が派生するのは当然の成り行きであった。これらの派生はすべてE転換である。英米で出版されている英語辞典のうち使用頻度順に意義を配列しているLDOCE<sup>5</sup>やOALDE<sup>6</sup>によれば、名詞“press”の意義のうちもっとも使用頻度が高いのは「報道記者(連)」である。

以上、“bottom” “road” “press”の3つの語の意義を通時的に概観してきた。

“bottom”は語源的な意義を現在に至るまで失っていない。一方、“road”は、乗馬のイメージを一気に払拭して「通行路」へと中心義を移してしまった。また、“press”は、名詞から動詞へと品詞を転換すると並行して、近現代社会の象徴ともいえる印刷術の発展およびそれに続く情報化社会の到来によって、名詞の新たな意義転換をみせた。

名詞“press”の意義のうち現代英語でもっとも頻繁に使われる「報道記者(連)」の初出は1926年で、80年足らずの歴史しかもたない。その短い期間に、名詞“press”の中心的意義を担うまでになった。語源的意義の「人込み」と「報道記者(連)」を直接的に関係付けることは困難である。

新しい意義は、はじめ発話の含意にすぎなかったものが慣用化することによって新たな意義として認知されることによって生まれる(Traugott 1986; Traugott 1989)。そのことによって、単義語は多義となり、多義語はさらに多義ネットワークを拡大していく。“press”にみる意義転換は、含意が即新たな意義として認知されていくほどのめまぐるしさを感じさせる。

#### 4 語義変化と多義ネットワークの相関

すでに指摘したとおり、語によって語源的意義と共時的ネットワークにおける中心義が一致したり一致しなかったりする。“bottom”では、両者は一致し、“road”と“press”では両者は一致しない。意義の転換は、一般に具体から抽象に向かうといわれる(Stern 1931; Lakoff & Johnson 1980; Traugott 1989; Sweetser 1990; Nerlich & Clarke 1992; Peters 1992)。そのために、語源的意義と共時的にみた中心義とが一致しない語においても、語源的な意義は大なり小なり、多義ネットワークのイメージに影響を与えつつあるように思える。“road”における人馬が往来するイメージ

や“press”における人が押しあうイメージは多義ネットワークを覆うイメージとどこかで重なっている。

当然のことではあるが、意義転換には幅の大きいものもあれば小さいものもある (Geeraerts 1985:139; Nikiforidou 1999:141-163)。たとえば、“road”の「乗馬 (の旅)」から「人馬の通行路」へのE転換は、ごく短期間で中心義が入れ代わってしまうほどの幅をもっている。“press”においては、名詞から動詞への品詞転換を伴う大きな転換の他に、「印刷」から「出版・報道」への転換も大きい。図1～3では、ドラスティックな意義転換によって形成された新たな意義グループを破線で囲ってある。意義グループどうしの中に共通してみられるのは、大きな転換点にメトニミー (E転換) が関与していることである。メタファーによるS転換は類似性にもとづくだけに、どのような根拠によって転換を遂げたのかを推測するのが容易である。一方、メトニミーは物と物が隣接することによって転換を遂げるために、どのような根拠によって転換を遂げたかを推測することが困難な場合がある。“press”には、壁に作ったくぼみを利用した「物入れ」という意義がある。おそらく壁の漆喰がやわらかいうちに物を押し付けて物入れ代わりに利用したことから生まれた意義であろう。そうであるとすれば、これは漆喰を圧すという行為によって物入れという結果を表すメトニミーということになる。しかし、これはあくまで推測にすぎず、歴史を溯ってその制作過程をつぶさに調べないことには確かなことはいえない。

## 5 むすび

語義の歴史の変遷を横軸に、そして共時的多義ネットワークを縦軸に取って記述することの最大の利点は、両者を同時に視覚的に確認できるために、任意の時代について当該語の多義ネットワークがどのような状態にあったかを容易に知ることができるところにある。ある語のある時代における多義のネットワークを調べるには、図1～3に縦線を入れるだけでよい。“bottom”が現代英語でどのような多義ネットワークをもつのかを知りたいければ、図1の右端に縦線を引けばよい。

本稿で用いた図解は、ある時代の多義ネットワークの姿を知ることができるばかりでなく、同時にどの意義とどの意義が、S転換・E転換・C転換のうちのどれによって互いに関連をもっているかを確認することもできる。歴史上のある時期に、生じた意義の転換は時代が下っても、その意義どうしを結ぶ関係性を保持しているからである。「印刷所」からE転換によって生まれた「出版」「報道」の意義は、現代においてもやはりメトニミックな関係を失ってはいない。

冒頭で述べたとおり、「多義とは、おおまかにいって、通時的意味変化の共時的反映」であるから、「共時的多義と意義の歴史的变化とは多くの点で同じデータを提供する」のである。

多義を通時的・共時的に観察し分析を加えることは、辞書の記述や外国語教育においてもきわめて有用である。

まず、辞書記述において多義はその辞書を特徴付ける大きな要素の一つである。とりわけ、学



習者用の辞典においては、一つの語のもつさまざまな意義と意義との間の有機的な関連を系統的に提示することが極めて重要である。学習者は、意義と意義とを結ぶ論理的な関係を見つけることができなければ、一つの語ではなく複数の語を覚えるのとはかわらない。

例えば、多義的な“charge”は学習者には厄介な語の一つである。学習者向けの英和辞典には他動詞だけでも次のような意義の訳語がならんでいる。

詰める, 弾丸を込める; 満たす; (電気を) 通じる; 充電する; (責任などを) 負わせる, (任務を) 託する; 命じる, 指示する; 非難する, …の責任 [せい] にする; 告訴する; (代金などを) 請求する; (税を) 課する; ついで買う; 襲う, 突撃する

これらの意義のどれをとっても使用頻度は低くはないが、学習者にとって意義と意義との間に論理的な関係を見出すのは容易でないだろう。

“charge”が英語に入る以前にまで語源を溯ると、おおむね次のようになる。

ラテン語 *carrus*: 車輪のある乗り物 > 後期ラテン語 *carrucare, carcare*: 荷を積む > 古期フランス語 *charge*: 積荷 > 中期英語

この語義の変遷から“charge”が車に荷物を積み込むイメージをもつ語であったことを知りさえすれば、現代英語におけるこの語の多義イメージを的確に捉えることができる。なお、辞書記述における多義の扱いについては山口(2001)がひじょうに参考になる。

語義の歴史的変化を図示する方法はこれまでも数多くある。しかし、本稿で試みた意義展開図は、語義の歴史的な変化と共時的多義ネットワークを同時に視覚的に確認することができる点で、さまざまな利用方法が考えられるであろう。

#### 参考文献

- Bréal, Michael. 1964 [1900]. *Semantics: Studies in the Science of Meaning*. Trans. By Mrs. Henry Cust. New York: Dover.
- Fisiak, Jacek. (ed.) 1985. *Historical Semantics: Historical Word-Formation*. Berlin, New York, Amsterdam: Mouton.
- Geeraerts, Dirk. 1985. “Cognitive restrictions on the structure of semantic change.” In J. Fisiak (ed.), 1985: 127-153.
- Geeraerts, Dirk. 1997. *Diachronic Prototype Semantics: A Contribution to Historical Lexicology*. Oxford: Clarendon Press.
- Kellermann, Günter and Michael D. Morrissey. (eds.). 1992. *Diachrony within Synchrony: Language History and Cognition*. Frankfurt am Main: Peter Lang.
- Lakoff, George and Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Nerlich, Brigitte and David D. Clarke. 1992. “Outline of a model for semantic change.” In G. Kellermann and M. D. Morrissey (eds.), 1992: 125-141.
- Nikiforidou, Niki. 1999. “Nominalizations, metonymy and lexicographic practice.” In L. de Stadler and C. Eylich (eds.), 1992: 141-163.
- Panther, Klaus-Uwe and Günther Radden (eds.). 1999. *Metonymy in Language and Thought*. Amsterdam: John Benjamins.
- Peters, Hans. 1992. “English boosters: Some synchronic and diachronic aspects.” In G. Kellermann and M. D. Morrissey (eds.), 1992: 529-545.
- 瀬戸賢一. 1986. 『レトリックの宇宙』. 東京: 海鳴社.

- 瀬戸賢一. 1995. 『メタファー思考』. 東京：講談社（講談社現代新書）.
- 瀬戸賢一. 1997a. 『認識のレトリック』. 東京：海鳴社.
- 瀬戸賢一. 1997b. 「意味のレトリック」. 卷下吉夫・瀬戸賢一. 『文化と発想とレトリック』. 93-177. 東京：研究社出版.
- 瀬戸賢一. 1999. 「語彙的メトニミーのパタン」. 大阪市立大学大学院文学研究科紀要『人文研究』第53巻 第5分冊: 105-116.
- Seto, Ken-ichi. 1999. "Distinguishing metonymy from synecdoche." In K. Panther K. Uwe and G. Radden (eds.). 1999: 91-135.
- Stadler, Leon de and Christoph Eyrich. (eds.). 1992. *Issues in Cognitive Linguistics: 1993 Proceedings of the International Cognitive Linguistics Conference*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Stern, Gustav. 1931. *Meaning and Change of Meaning*. Bloomington: Indiana University Press.
- Sweetser, Eve. 1990. *From Etymology to Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Traugott, Elizabeth Closs. 1986. "From polysemy to internal reconstruction." *BLS* 12: 539-50.
- Traugott, Elizabeth Closs. 1989. "On the rise of epistemic meanings in English: An example of subjectification in semantic change." *Language* 65: 31-55.
- Traugott, Elizabeth Closs and Richard B. Dasher. 2002. *Regularity in Semantic Change*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ullmann, Stephen. 1957. *The Principles of Semantics*. Oxford: Blackwell, 2<sup>nd</sup> ed.
- Ullmann, Stephen. 1962. *Semantics: An Introduction to the Science of Meaning*. Oxford: Basil Blackwell.
- Ullmann, Stephen. 1964. *Meaning and Style: Collected Papers*. Oxford: Basil Blackwell.
- 山口治彦. 2001. 「多義語を記述するために—多義構造と辞書記述のテキスト構造—」. 『神戸外大論叢』52.2: 61-91. 神戸市外国語大学研究会.